
嗚呼愛しの弟君

朝河 風火

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

嗚呼愛しの弟君

【Nコード】

N7920H

【作者名】

朝河 風火

【あらすじ】

何でか分からないけど生まれ変わっちゃいました。…嘘じゃないです本当に。信じてください。生まれ変わった先は江戸時代で、私は双子の二卵性双生児の姉です。何故か二人とも髪が銀色で目が赤いです。そのせいで親に名前も貰えず捨てられましたが何とか生きてます。弟は凄く可愛いです。大好きです。…そーいや弟って前世で見た誰かと似てるんですね。誰だったっけ？…あ、坂田銀時だ。って、エエエエエツ?!この世界は『銀魂』ですか?そして私は主人公の姉?!――17+5歳、坂田銀夜。弟を守り、守ら

れながら精一杯生きてますー。でも恋もしたいです…。

自己紹介代わりの回想

ごほんっ

あーあー、……………わーれーわーれーはー…なんだろ？……………にー
んーげーんーだー

……………おまえのかーちゃん××だー……………わたしのかーちゃんばけも
のだー……………うそです、うそです。人間です。あつぶねーよ、お
い。今どつかから殺気飛んできたって。母ちゃん怖エよ……

……………ん？あれ？！これもう繋がってんの？

マジでか。今までの恥ずかしいトークとか全部駄々漏れ的な感じで
すか？うつわー、やっちゃったなー、うん。やっちゃったよおい。
ま、いつかこの際開き直ろう！

では、改めて初めまして。私の名前は『朝石^{アサイシ} 銀夜^{ギンヤ}』今をときめく
高校2年生だよ。

…そこ、古いって言わない！

えっと私の自己紹介、ぶろふいる？っていうの？ソレはこんな感じ。

容姿は中の中。可もなく不可もなく平凡な何処にでも居そうな感じ
ですかね。はい。

頭の出来は中の中から中の上？得意科目は国語、数学、理科。国語
が得意なのに片仮名が苦手なのは気にしないで。私自身が凄く気に
してるから。

身体能力は自分で言うのもなんだが上の上。剣道のいんたーはい？
では優勝しちゃいました。

うん、まあ大体平凡だね。気に入ってるからいいんだけど。

とまあ、こんな感じが“今まで”の私。

え？何で“今まで”かって？

それはまたの話でお願いします。

気がつくと赤ん坊でした

「……っ……あ」

「……う……」

ん……煩いなあ。

母ちゃんまだ寝させろよ。今日は学校休みでしようが。

「……て……こい！」

「……や……の……ども……す！」

あれ？母ちゃんの他にも誰か居るの？誰だよ、人の部屋勝手にはいんなよ。

「うわアアアア……！！“鬼子”だア！」

「おい！早く“ソレ”を捨てて来い！」

「待ってください！“その子”は私の子供ですよ？！」

……は？ちょ、ちょっと待て。良く聞くと母ちゃんの声じゃないし、人が一杯いるっぽいんですけど？！

「そんな“モノ”は俺の子供ではない！」

「違います！正真正銘貴方と私の子供です！」

「落ち着くんだ春。“アレ”は人間ではない“鬼子”だ。“アレ”はお前の子供ではない。お前の子供は腹の中で鬼に喰われたのだ」

「違います！その子は……！うつ！」

「おい、もう“一匹”産まれるぞ！」

へ？産まれる？何が？赤ん坊が？

ほぎゃーほぎゃー

「産まれた！髪と目を見る。“ソレ”も“鬼子”だ！」

「捨てろ！捨ててこい！」

「やめてください！それだけは…！私は“その子達”を育てたいのです！」

え？その子達？一人じゃないの？あ、今さっきの子が産まれる時に誰かが「もう一匹」って言ってたね。

てか子供を「一匹」呼ばわりすんなよな。子供は国の宝なんだぞウ

！……自分で言ってキモく感じた。これどうよ？

「とにかく駄目だ！」

ヒョイツ

へ？

いきなり体が宙に浮いた。

……私そんなに軽くないですよ？あー、重いつてわけじゃないんだ！標準くらいなんだ！でも標準くらいの女子高生の体をくヒョイツ>と持てますか？アンタどんだけ力持ちなんですか？！

と、そこで私の目が開いた。

んーばやけて良く見えない。

何度が瞬きするとようやく周りが見えた。
が、

「こんな“モノ”を育てるわけにはいけない」

What?

何で私はめっさ怖い形相をした男の人に抱きかかえられてるの？
ってか周りに居る人等も顔怖エよ！

あ、怖い顔してない人、一人居た。うっわー、美人さんだなア。
美人さんは赤ん坊を一人抱えて此方を縋るような目で見ている。

腕の中に居る赤ん坊はまだ泣いているが、私とその赤ん坊に目を向けると、赤ん坊も此方を見て泣き止んだ。そして私に向かって柔らかそうな手を広げたり閉じたりしてる。

…あれは多分呼ばれてるんだろぅな。

「あいゝ（はいゝ）」

…あれ、おかしいな？何で私の口から零れる言葉は赤ん坊のようなんだ？

「あう、あ…（まさ、か…）」

私がもう一人の赤ん坊ですかー？！

朝石 銀夜、17歳。気がつくと赤ん坊でした。

今日も何とか生きてます

どうも。

前世、朝石 銀夜。

現世、名無し。の私です。

いや、あの後『春さん』…この世界での母さんね。が一生懸命周りの人たちを説得してくれて私と弟は何とか育ててもらえることになりました。

た・だ・し、村外れの蔵の中ですけど。でも殺されなかっただけ儲けものですよねー。本ッ当に良かった。

週一でしか母さんに会えないし、蔵の中は暗いし、埃っぽいし、着る物も食べる物も満足に与えられないけど生きてますよ。私たち。

今まで二人で生きてきました。

って言っても、励ましあって生きてきたとか、そういうんじゃないんです。

ただ二人寄り添って、お互いが崩れないように、壊れないように、毎日が地獄でも生きていける意味があるように生きてたんです。

弟は私の前以外ではあまり言葉を話さない。言葉はある程度理解している筈だ。私が少しずつ必要な言葉だけ教えたから（本当に必要だと思ったものだけ）。

それは春さんに対してもだ。

私は春さんと弟以外とは決して口を利かない。あんな大人どもなんかに話してやる言葉なんか無い。でも、春さんと弟には饒舌な方だと思っ。

でもあまり話さないせいか、弟も私も口が上手く回らない。だから単語でしか話が出来ない。

ま、それでも今は充分かな？

春さんは優しい。

言葉の端々に滲み出る優しさに、本当に私達を愛してくれているのが分かる。

優しく接してくれるのはとても嬉しい。それは弟も一緒に、春さんが来ているときはいつもよりも表情が柔らかくなっている。

春さんもそれは分かっているみたいで、私達に会いに来るときはいつも嬉しそうな顔ばかりしている。

その春さんが言った。

「今日はあなた達二人の誕生日なのよ」

どうやら私達は5歳になったらしい。

そして春さんは誕生日のお祝いだと言って、私達に一本ずつ刀をくれた。

お揃いの鞘が白い刀でとても綺麗だった。

「村の人たちには内緒よ。見つかったら取り上げられてしまうから」

なるほど、こっそり持ってきてくれたわけか。

『「ありがとう、かあさん」』

大切、する。

そう言っていると春さんは苦笑して、本当はもっと良いものをあげられたら良かったんだけど……。と私達の頭を撫でた。

『これで、いい』
「おれ、うれしい」

刀は寝るところの布の下に隠す。

春さんはそれを見届けた後、もう一度私達の頭を撫でて

「じゃあまた一週間後にね」
『ん』
「まってる」

幸せそうに笑って蔵から出て行つた。

『……………』
「……………」
『かあさん、が』
「わかつた、る」
『ちが、う。わかつてる』
「わかつてる。だいじ」
『うん。だいじ、に、する』

端から聞いたら何のことか多分わかんないだろう。
だからちゃんと意味が分かるように←に今の会話の書き直しました。

『かあさんがくれたものだから大事にしなくちゃ』
「わかつた、る？」
『ちがう。わかつたるじゃなくてわかつてる』
「わかつてる。だいじに」
『うん。だいじにしよう』

こんな会話でした。分かりますよね！。
でも私達はこれで意味がわかったんですよ。恐るべし姉弟パワー……。

そんなこんなで私達の5歳の誕生日はこれで終わりました。
プレゼントは刀が一つ。でもかけがいの無い大切なプレゼントでした。

つてかもう5歳か！。月日が流れるのは早いな！。

私がこの世界に来たのが17歳の時だからそれから+5歳……。
今、精神年齢22歳？老けたな！。

ろくに恋もしないまま青春時代終わっちゃったよ。グッバイ、私の青春。

「ね」

『なに』

「ねる」

『そう。ねよ』

「おやすみ」

『ん』

弟が眠いって言うんで寝ることにしました。

ぶつちやけ私も眠かったんだけどね。ははははは、気にしない。

子供の身体になってから睡眠時間が急激に増えた。これって良いこと、悪いこと？

ま、良いや。寝よ。

おやすみなさい！。

前世、朝石 銀夜。

現世、名無し。の私。

今日も弟と生き抜きました。

あの人が死にました

「出る」

何時も通りばおっと天井を見て過ごしていたら行き成り蔵の外から沢山の人が入ってきて引つ張られた。

母さんから貰った刀は布の下に置いてあるから取りにいけない。

私達は為す術も無く、何年ぶりか分からない外の世界へ放り出された。

倒れこんだ体の下を感じる土の感覚は温かったけど、上から降り注ぐ太陽の光は薄暗い蔵の中ばかりにいた私の目を鋭く刺した。すごく痛い、んですけど…。

弟にこの痛みを与えたくなくて弟の目を私の手で隠した。

幸いにも弟はまだ目を開いていなかった。良かった良かった。

そして心の中で安堵している私の耳に信じられない言葉が飛び込んできた。

「春が死んだ」

シンダ？ダレガ？カアサンガ？

『う、そ』

「しんだ？」

弟は死というものが分かってないようで（その手の知識については教えてこなかったから当たり前といえば当たり前なんだけど）きょとんと言葉を繰り返す。

まあそれは置いといて。

母さんが死んだのか。

あの優しい人が、

あの美しい人が、

あの可愛い人が、

あの甘い人が、

あの母親が、

あの私達の母親が、

シンダのか。シンダのか？コロサレタのではないのか？

『なんで？』

「病で死んだ」

ああ、コロサレタのではないのか。

良かった。殺されたのではあの人の魂が浮かばれない。

そのこと安堵して口元を緩ませると目の前の男が言った。

「お前たちはこの村から出て行ってもらう」

だろうね。そんな気がしてたよ。

私達がこの村に居られたのは母さんが必死に頼み込んだからだ。その母さんが居なくなったら今、私達を村に置いておく必要はない。

殺されないだけ良しとしよう。

『ん』

こくつと頷くと別の女が袋を持ってきた。そしてその袋を投げ渡される。

「春からだ」

『かあさん？』

「持って行け。そして早くこの村から出て行け」

袋を眺めていると男達は踵を反して村の中心部のほうへ戻っていた。

「これ」

ぼおつと袋を眺めていると弟が私の目の前に一つの紙を突き出した。

「よむ」

『……むり』

ごめん弟よ。5年のブランクは文字をも読めなくしてることに今気が付いたよ。

如何見ても線が曲がりくねってるようにしか見えない。これってやばい？

弟は私が読めないことを知ると興味をなくしたように手紙を袋の中に戻して他のものを引っ張り出している。

「ぬの？」

『ふく』

袋の中には手紙と服が入ってた。

母さんはいつでも私達に一番大事なものをくれていたから、これも母さんが私達に必要なだと思ったものなんだろう。

『あ』

「ん？」

『かたな』

「あ」

危ない危ない。二人して刀のことを忘れるところだった。
母さんに貰った初めてのプレゼント。その他のプレゼントも大事に
大事に使っていいこう。

「いく？」

『いこう』

とりあえずはこの村から出て行かないと。いつまでも出て行かない
と殺されてしまう。

求めるは、安息

求めるは、安泰

求めるは、名前

求めるは、未来。

でも今は、

「にあう？」

『にあう』

弟と過ごせる時間が一番。

その他の求めるものはまた今度。

そして私達は初めて村の外に足を踏み出した。

姉と弟の思考回路

姉視点

寒いな…。

雪の中のろのろと歩みを進めながら弟の手をしつかりにぎり吹き付ける雪に目を細めながら歩く。

きっとここで立ち止まったら死んでしまうんだろうな…。

弟は片方の空いている手でふとももや腕を擦っている。

荷物を背負っている分には背中が温かいから私たちは荷物を背負っている。

母さんがくれた着物は温かいけどそれでも吹き付ける雪が奪う体温は減ってくれない。

2回の冬だけど冬は好きじゃない。

食べ物を探してもないし、潜り込んだ所はどこも寒いし、人はいつも以上に怖くて直ぐに襲ってくる。

南の方が北の方より暖かいんだと弟に言って、私は手を引いてゆっくり南下する。

草履なんてもの持ってなかったし、雪をしのぐ笠も持ってない。

冷たい雪の上を裸足で歩くと、冷たいところの騒ぎではなく痛みを感じるのでも自分の着物の裾を破って自分と弟の足に巻きつける。

母さんから貰ったものだけでしょうがない。寒さには勝てないもの。私の吹き付ける雪が腕に積もっているのを見て弟は腕についた雪を払う。

今日のねぐらが見つからなかったら、このまま凍死してしまうかも知れない。

はやくはるがくればいいのに。

泥だらけの髪の毛が凍っているのを見る。

はあっ…。

弟が指先にまた息を吹きかける音が聞こえた。もうどこからどこまでが自分の体なのか弟の体なのか分からない。

感覚はなくて、途切れる事なく降ってくる雪が暖かいような気さえしてくる。

このままゆきのうえでねてしまおうか。

待っているのは緩やかな死だけなのは分かっていた。

でも……

きっと弟以外誰も悲しまない。

それが姉は悲しかった。

弟視点

寒いなあ。

姉の手に引かれながら俺は手の平に息を吹きかけ、紫に変色したふとももを擦る。

冬は好きじゃない。

どこに潜り込んでも寒いし、食べ物がないてひもじいし、寒さのせいか食料が少なくなってくるせいか、人々はいつもより表情が険しい。

南の方が北の方より暖かいんだと言った姉の話を聞いて、俺は手を引かれゆっくり南下する。

草履なんてもの持ってなかったし、雪をしのぐ笠も持ってない。

冷たい雪の上を裸足で歩くと、三歩もしないうちに冷たさよりも鋭い痛みが襲ってきた。

姉はそんな俺を見て着物の袖を引き千切って自分の足と俺の足に巻いてくれた。

寒さに真っ赤になる腕を擦り、指先に息を吹きかけ、太ももからつま先を擦り姉の腕に雪が積もっているのをどけた。

今日のねぐらが見つからなかったら、このまま凍死してしまうかも知れない。

はやくはるがこないかなあ。

泥だらけの髪の毛が凍っているのを見る。

はあっ…。

指先にまた息を吹きかける。もうどこからどこまでが自分の体なのか姉の体なのか分からない。

感覚はなくて、途切れる事なく降ってくる雪が暖かいような気さえしてくる。

このままゆきのうえでねてしまおうか。

待っているのは緩やかな死だけなのは分かっていた。

でも……

きっと姉以外誰も悲しまない。

それが弟は悲しかった。

お互いに共通している思考回路。
思っているのは

はやく

あたたかい

はるが

こないかなあ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7920h/>

嗚呼愛しの弟君

2010年10月12日03時51分発行